昌平黌の歴史と目的～孔子の教えを礎に、日本人づくり・国づくり～

元いわき短期大学教授（民族学）故藤沢衛彦 記

東日本国際大学の基となったいわき短期大学は、昭和 41 年（1966 年）４月１日開学、昌平黌精神によって設立されたものであり、この年代表が示す通り、徳川氏は将軍の侍読であった林道春（大学頭家の祖・羅山）の儒教を支持し、講学の地（５千余坪）を上野忍ヶ原に与えて私塾弘文館の建設を援助した。その後、尾張大納言義直は主命により弘文館に孔子像を祀る聖堂を建立、後に将軍家光は廟に参じ羅山に「尭典」を講ぜしめ、ついで釈菜の例を行わしめたのが、昌平黌の起源であり、これにより、徳川幕府は朱子学を道徳の基本として、幕府の精神的支柱とした。

明歴３年（1657 年）江戸に大火があり、廟堂焼失、図書、祭器の諸庫も弘文堂も焼失したため、一時期これを改造し授業を行ったが、元禄３年（1690 年）に五代将軍綱吉が再建を命じて、上野の土地が手狭となり神田湯島台に大成殿を建立。孔子の像を移させ、昌平坂学問所と唱えた。湯島聖堂、聖橋、昌平坂、昌平橋などはこのときからの呼称である。

昌平黌学問の貫く根本は、孔子の教えをもとにした朱子学であり、その呼称は、孔子誕生の地名、中国魯の昌平郷をとり、昌平黌としたものである。一方、昌平の意は、国運が盛んで泰平を指すと考えられ、八代将軍吉宗の時代（1716～1745 年）には殊に厚い加護を受けてきた。

天明６年（1785 年）昌平黌は再び火災に見舞われ聖堂もろとも孔子像を焼失し、寛政 11 年（1799 年）の聖堂再建までの 12 年間は、木像がわりの孔子画像が祀られた。その画像はときの尾張大納言が同藩儒官明倫堂督学、細井徳民（平州）に命じて描かせたものであり、後、故あって江戸開城に功績のあった勝安房（海舟）の許に保存され、その後、本学の黌宝として引き継がれてきたという意義深いものであり、この画像、すなわち天明の昔、昌平黌の儒子たちに拝されてきたものであると伝えられる。

寛政４年（1792 年）老中松平定信の寛政の学制振興策によって、異学を禁じ、大学頭には植村候から入って林家を継いだ烈が就任、尽力したため、昌平黌学業試問に応ずるもの三百数十人という激増ぶりを示し、かつ、諸藩士および処士の入学を許可したことから、幕府官立の学問所として学習院と並び威名を海内に振るうようになり、幕府文教の中心機関としての性格を一層明確にした。

斯くして昌平黌の目的は、日本人づくり、国づくりにつながり、その精神はやがてまた明治の教育に引き継がれ、昌平黌は維新後、明治２年（1869 年）東京大学の前身となった。昌平黌幕末の塾頭は儒者佐藤一斎であり、その高弟であった田辺新之助は昌平黌精神を敬愛し、本学の前身である現開成学園を創立。さらに明治 36 年（1903 年）昌平中学を設立し、昭和 23 年（1948 年）学制改革により昌平高等学校となり、そのまま現法人に引き継がれ、昌平黌いわき短期大学が設立されたが、続いて平成７年４月には、東日本国際大学の開学となり、昌平黌建学以来の大精神が生かされている。

なお、湯島聖堂は今日も聖廟、孔子廟として存在する。